

日本の植民地歴史教科書に関する一考察 ——「朝鮮」と台湾の「国史」（日本歴史）教科書を中心に——

磯田 一雄

1. はじめに——植民地朝鮮と台湾の比較をめぐって
2. 歴史教科書の実例の比較——「神功皇后の新羅征服」
3. 朝鮮と台湾の「国史」教科書の違い
4. 「内鮮一体」と教科書の共用
5. 「皇国史観」の原点としての神功皇后神話教材——征服と交流のバランス
6. 国語（日本語）教育と国史（歴史）教育との相互関連
7. 結び——「民族意識抹殺」の諸相の究明を

キーワード：国史、皇国史観、神功皇后の「新羅征服」、朝台比較、国語（日本語）教育

1. はじめに——植民地朝鮮と台湾の比較をめぐって

温井寛氏は『アジア・フォーラム』19で次のように述べている。

……不思議に感じたのは台湾の人々の柔らかな対応である。中国本土の東北地方には数回行っているが、いどこを歩いても刺すような痛く厳しい視線をからだ全体に感じたし、韓国のパゴダ公園に献花に行った時には罵声すら浴びせられた。日本の原罪への償いが終わらず、国民的和解に至って

いない以上、甘受しなくてはならない。だが同じ植民地支配の犠牲となった台湾人から、あからさまな非難の言葉も、態度も見られなかった。何故なのか、その歴史的背景を確かめたいという衝動に駆られたのである。

筆者は韓国はよく訪問しているものの台湾にはまだ2回しか行っていない。そんな乏しい体験で感じたことを、ここで引き合いに出すのは僭越だが、かつてこう書いたことがある。

今回の調査旅行（1990年3～4月、筆者注）で……まず印象に残ったのは、私たちの出会ったほとんどの人が、植民地時代のことを聞いてくれることが非常に嬉しいという感じであったことである。……植民地時代の教育をそんなに悪く思っていないというよりも、むしろ肯定的に受け止めているような感じにさえさせられることも多かった。これは調査者として有難いというより、率直に言ってむしろ意外であった。

……さらに、こういう聞き取りをすること自体朝鮮（韓国）ではそう簡単にできることではない。初対面の人はもちろんのこと、かなり親しくなった人であってもそういう話題に触れることを避けようとする人が多い。

……韓国では皇民化教育を忌み嫌い、日

本語が分かっているでも使いたがらない人が多いのに対して、台湾では日本に好感を持ちむしろ喜んで日本語を使おうとする人のほうが多いような印象を受ける。これは何に由来するものであろうか。⁽¹⁾

こうした「反応の違い」の由来を究明することは、方法論的にも東アジア研究の重要な軸になるものだと筆者は考えている。韓国・台湾や中国などの植民地化に対する「反応」は、そこで日本が行ったことだけにとどまらず、そこに至る歴史的背景や（例えば朝鮮は日本を文化的には「弟」視していた）、戦後半世紀余の国内的・国際的な環境の影響が密接に関係しているからである。

ここで重要なのは「植民地化」と「近代化」とを相対的に区別することであろう。いわゆる日本帝国主義の東アジア侵略時代は、東アジアが急速な近代化を余儀なくされていた時期でもあった。教育もその例外ではない。日本の統治において密接に関連していた近代化と植民地化を相対化しうるか否かが上の「反応の違い」に影響しているように思われる。この点について、E.P.Tsurumi は台湾を主要な対象としながら、その植民地化過程を朝鮮と比較しつつ興味深い見解を展開している。⁽²⁾

日本の植民地時代の台湾と朝鮮は、政治的・行政的にはほぼ類似しており、教育政策は朝鮮と台湾とでほとんど区別できない、と Tsurumi はいう。1910年の「併合」以前から既に韓国政府への日本のアドバイザー達は台湾を教育のモデルと見ていた。本土の公教育の植民地版としての初等教育中心の教育制度も同じであり、学校とカリキュラムは両者とも似てい

た。両者とも1919年以後の同化政策の実施のために、1922年教育令を公布したことも同じである。両者の教育目的が皇民化と近代社会への適応だったと言う点でも同じである。しかし政治的統治と教育政策の点で台湾と朝鮮はよく似ているにもかかわらず、日本の統治と教育の結果は多くの点で全く違ってしまったと指摘する。

まず台湾でも朝鮮でも独自の初等教育が整備されるまで既存の学校の存在が許されたが、その後は極力これらの学校を圧迫した。しかし台湾では公学校が増えるに従って現地民の書房教育への要求が減って行ったのに対し、朝鮮では書堂の果たした役割は最後まで大きかった。また台湾では私立学校が公立学校を脅かすようなことにはならなかったが、朝鮮では経済的負担にもかかわらず私立学校を希望する親が多数いた。台湾では日本の教育とともに導入されたスポーツが人気を呼び、日本の統治者への好感を抱かせたが、朝鮮ではそのようにはならなかった。台湾では一般に日本の教育を受けるほど同化される傾向にあり、公教育は現地民を日本の導入した政府や制度と和解させるのに大きな役割を果たした。日本の教育を受けた知識人の中に反植民地運動を進めたものもいたが、多くの場合この運動は穏やかなものでリーダーは完全に日本の法的・行政的枠組みの中で動いていた。対照的に朝鮮の日本の学校は続々と反日の闘士を生み出した。そして朝鮮から日本人を駆逐する永い妥協の無い戦いにおいて民族立私立学校の卒業生と合流したのである。

さらに朝鮮民族の強力な反日的反応は教育以外の要因を無視できない、と Tsurumi は言う。台湾人の祖先は大陸で生活できなくて渡ってき

(1) 拙論「台湾の皇民化教育の事跡をたずねて」、『アジア文化』17、1992年。

(2) E. Patricia Tsurumi, "Japanese Colonial Educa-

tion in Taiwan, 1895-1945", Harvard University Press, 1977. 細部については疑問もあるが今は論じない。

たのであり、台湾が日本領になるとき2年間の猶予付きで日本人になるか中国大陸に帰るかの選択の余地が与えられていた。事実政府の高官や上流階級はほとんど中国本土に帰っている。そのため日本の統治は激しい愛国主義者の抵抗に逢うことがなく、概ね平和と安定をもたらした。これに対して朝鮮は誇り高き王朝の伝統と古代文化とをもった一国全体が併合されてしまった。朝鮮人には上下官民を問わず外に行く先はない。王朝もその儘ソウルに留まっているのである。「京城」は李王朝の首都ソウル（漢城）が強奪されたものである。首都北京から遠く離れた僻地「台北」とは比較にならない。もともと清朝は外来民族の支配だし、権力の中枢が日本に移ってもそれほど衝撃的ではない。台湾では富裕な階層は多く商人で、彼らは日本との関係で利益を得ていた。

これに対し李王朝の朝鮮では筋骨が決定的であって、両班階級が政府の中枢を占めていたので、日本は知識階級全体を敵に回すことになった。さらに朝鮮では既に欧米宣教師たちを通して近代化のモデルを知っており、日本に頼らなければ近代化出来ないわけではなかった。また日本は中国文化は尊敬していたが、朝鮮文化は軽蔑しており、朝鮮王朝の取り扱い方が侮蔑的で陰謀的に見えたことも恨みを買った。台湾では日本の統治が農民の生活を悪化させたことはないが、朝鮮ではほとんどの農民が土地の登録と金納制によって莫大な被害を受けた。しかも永年所有してきた土地を農民が失うにつれ日本からの移住農民——台湾より多い——がますます多くの土地を持つようになった。朝鮮人の農民も一部は富裕な地主になっているのだが、日本人地主のほうが目に付くので当然目の敵にされた。

農業政策も工業政策も朝鮮よりは台湾のほう

に多くの利益をもたらした。朝鮮米は台湾米より日本で需要が多く、米の需要が減り始めた1929年でも、台湾人は朝鮮人の2倍の米を食べていた。1937年台湾では36.3%が電気を引いていたが、朝鮮では11.9%に過ぎなかった。ところが同年の朝鮮の水力発電量は台湾のほぼ3倍もあった。就職や賃金の差別も朝鮮のほうがひどかった。富裕になった台湾人は一部に過ぎなかったが、ほとんどの台湾人がより健康になった。差別に気付いてからも、パイの分け前をもっと大きくすることを求めたのであって、パイそのものを否定したのではなかった。日本の教育を受けることがパイの分け前を大きくする道であることは明らかだった（特に医者の場合）。差別は憤っても特に日本の高等教育を受けた台湾人は日本に引き付けられるようになった。

こうしたもろもろの条件が同じ「日本化」教育の効果を逆転させたのである。「類似の植民地教育政策は必ずしも類似の結果をもたらさない」。台湾人の日本教育に対する反応はどう見ても朝鮮人よりずっと肯定的であることは確かだ、というのがTsurumiの結論である。

2. 歴史教科書の実例の比較—— 「神功皇后の新羅征服」

「類似の植民地教育政策は必ずしも類似の結果をもたらさなかった」というTsurumiの指摘は卓見だとは思うが、それだけではとらえ切れない問題もある。実際に教育内容に即して検討してみるとかなりの相違もあったからである。それを単にマイナーな事柄として切り捨てることは避けるべきだろう。

朝鮮と台湾の初等教育（朝鮮：普通学校のちに小学校、台湾：公学校）の教育課程の変遷を「言語・地理・歴史」に限って比較してみると

「表1」のようである。言語（国語）を含めたのは、歴史が言語教育と密接な関連があるからである。

朝鮮・台湾とも日本語を最初から「国語」としている。朝鮮の場合は併合以前に既に普通学校が成立しているが、韓国学部時代に「国語」と言えば朝鮮語のことであり、日本語は「日語」と呼ばれていた。時間数もちろん朝鮮語（国語）のほうがずっと多かった。

次に朝鮮には「朝鮮語及漢文」の時間があったが、台湾には「漢文」だけで「台湾語」の時間が設けられていなかったのは重要な違いである。ただし漢文は朝鮮では朝鮮語読みであり、台湾でも台湾語読みであって日本語読みではなかったから、台湾では「漢文」が実質的に「台湾語」の時間であったと言えなくもない。しかしやはり「母語」の時間が初等教育の基礎にあるか否かは重要な違いである。

さらに重要なのは日本語の時間数の違いである。同じ時期で見ると、台湾の方が朝鮮よりも「国語」の時間数が多かったことがわかる。さらに朝鮮ではほぼ「朝鮮語」の時間の分だけ「国語」の時間が台湾より少なかった。逆に言えば、朝鮮での「国語」と「朝鮮語」の時数の合計が台湾での「国語」の時数にほぼ相当することが読み取れる。つまり朝鮮は台湾に比べるとカリキュラムの上ではバイリンガルで、日本語習得の条件がそれだけ厳しかったことになる。

歴史と地理が日本統治期の初等教育の課程に初めて置かれたのは朝鮮も台湾も同時期であった。しかしこれは民族の歴史に誇りを持たせるようにするためではもちろんなかった。朝鮮においては大韓帝国が日本の保護国となると同時に朝鮮史教育の抑圧が始まっていた。朝鮮史は

もとより歴史科目の設置をなるべく抑えようという朝鮮総督府の方針は当然激しい抵抗を受けた。私立学校や書堂で民族史を教えたために教師が拘引されたような事態が頻発したのである。しかし歴史教育抑圧の方針は1919年の三一独立運動の与えた衝撃によって転換された。各学校で朝鮮史を教えさせず、知識人が朝鮮史を読むことを禁止してきた政策が逆行かを生み、反って激烈な愛国史書が広く流布するようになったのだという「反省」から、逆に日本の植民地主義の歴史観に適合するような朝鮮史を教えることにしたのである。⁽³⁾ 類似の方針は台湾にも及んだ。

その最初の歴史教科書である、朝鮮総督府発行『普通学校国史・児童用・上巻』（1923年）と、台湾総督府発行『公学校日本歴史・上巻』（1923年）を、同じ主題である「神功皇后の新羅征伐」を例にとって比較してみよう（冒頭の括弧内の表題、原教科書では野線の上に小活字で記載されている。なお仮名2字にわたる繰り返し符号は通常表記に改めた）。

朝鮮総督府第一期歴史教科書＝『普通学校国史』児童用 上巻、1923年

（熊襲を討ちたまふ）仲哀天皇の皇后を神功皇后と申し、御生まれつき賢くををしくましませり。天皇の御代に熊襲またそむきしかば、天皇は、皇后と共に九州にみゆきしてこれを討ちたまひしが、いまだ平がざるうちにかくれたまへり。

（新羅を討ちたまふ）此の頃朝鮮には、新羅・百済・高麗の三国ありて、之を三韓といへり。中にも新羅は最も我が国に近く、且その勢強かりき。されば皇后は、まづ新羅を

(3)この経緯については拙著『「皇国の姿」を追って—教科書に見る植民地教育文化史—』、皓星社、1999年

第Ⅱ部第二章「異民族に強制された「皇国の姿」——朝鮮の国史教科書の変遷（一）」参照。

表1 日本植民地時代台湾と朝鮮の言語と地理歴史教育課程の変化

朝鮮での変化

第一次朝鮮教育令 (1911年)

学年	I	II	III	IV
国 語	10	10	10	10
朝鮮語	6	6	5	5
国 史				
地 理				
総 計	26	26	27	27

(朝鮮語の科目名は朝鮮語及漢文、以下同じ)

第二次朝鮮教育令 (1922年)

学年	I	II	III	IV	V	VI
国 語	10	12	12	12	9	9
朝鮮語	4	4	3	3	3	3
国 史					2	2
地 理					2	2
総 計	23	25	27	29	29	29

(4 - 6 学年女子は30)

第三次朝鮮教育令 (1938年)

学年	I	II	III	IV	V	VI
国 語	10	12	12	12	9	9
朝鮮語	(4)	(4)	(3)	(2)	(2)	(2)
国 史					2	2
地 理					2	2
朝鮮語は随意科目、総計に含む						
総 計	26	27	29	32	32	34

(4・5 学年女子は34)

第四次朝鮮教育令 (1943年)

学年	I	II	III	IV	V	VI
国 語	11	12	9	8	8	7
(1・2 学年は修身を含む)						
朝鮮語	— 廃止 —					
国 史					2	2
地 理				1	2	2
総 計	23	25	27	32	34	34

台湾での変化

台湾公学校規則 (1912年)

学年	I	II	III	IV	V	VI
国 語	12	12	12	12	10	10
漢 文	5	5	5	5	男 4	男 4
(5・6 学年男子は1918年より2・2)						
地 理 (1918年より)					1	1
総 計	26	28	30	30	32	32

台湾公立公学校規則 (1922年)

学年	I	II	III	IV	V	VI
国 語	12	14	14	14	10	10
漢 文	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)
日本歴史					2	2
地 理					2	2
総 計	22	24	26	29	32	32

漢文は随意科目、総計に含む

台湾公立公学校規則 (1933年)

学年	I	II	III	IV	V	VI
国 語	12	14	14	14	10	10
漢 文	— 廃止 —					
国 史					2	2
地 理					2	2
総 計	22	24	26	27	30	30

台湾公立国民学校規則 (1941年)

学年	I	II	III	IV	V	VI
国 語	13	15	12	11	7	7
(1・2 学年は修身を含む)						
国 史					2	2
地 理				1	2	2
総 計	22	24	26	29	30	30

したがへなば、熊襲はおのずから平がんとおぼしめし、武内宿弥とはかり、御みずから兵をひきゐて新羅を討ちたまふ。時に紀元八百六十年なり。

皇后は御出発の前、香椎の海べに出で、御髪を解き海水にて洗ひたまひて、男の如くみづらといふ髪の方にゆひ、人々に向ひたまひて、「われ今かりに男のすがたになりて軍をひきゐ、神々の御たすけと汝等の力とによりて新羅を討ちしたがへん。」と仰せられしに、武内宿弥をはじめ一同つゝしみて、「仰にしたがふべし。」と答へたまつれり。

(三韓我が国にしたがふ) 皇后舟いくさをひきゐて対馬にわたり、それより新羅におしよせたまふ。軍船海にみちみちて、御勢すこぶる盛なりしかば、新羅王は大いに恐れていはく、

「東の方に日本といふ神国ありて、天皇といふすぐれたる君いますと聞く。今来れるは、必ず日本の神兵ならん。いかでかふせぎ得べき。」と。たゞちに白旗をあげて降参し、皇后の御前にちかひて、「たとひ太陽西より出で、川の水さかさまに流るゝ時ありとも、毎年貢はおこたり申さじ。」といへり。やがて皇后凱旋したまひしが、其の後百済・高句麗の二国もまた我が国にしたがへり。

(皇后の御てがら) かくて、これより朝鮮は天皇の御徳になびきたがひ、熊襲もおのづから平げり。又第十五代応神天皇の御代に、王仁といふ学者など百済より来りて学問を伝へ、機織・鍛冶などの職人も、おひおひ渡り来りて、わが国ますます開けしは、全く神功皇后の御てがらに基づきしなり。

(ルビ・挿し絵・地図省略)

台湾総督府第一期歴史教科書＝『公学校日本歴史』 上巻、1923年

(熊襲御征伐) 第十四代仲哀天皇は日本武尊の御子で、皇后を神功皇后と申します。皇后はお生まれつき賢くをゝしいお方でいらされました。此の御代に熊襲がまたそむきましたので、天皇は皇后と御一緒に九州においでになつて之を御征伐になりましたが、まだ賊の平がない中に、天皇はおかくれになりました。

(新羅御征伐) 此の頃朝鮮には三韓といつて、新羅・百済・高麗といふ三つの国がありましたが、其の中新羅が一番強く、一番我が国に近かつたので、皇后は「先づ新羅を従へたら、熊襲は自然に平ぐだらうとお考へになりました。それで武内宿弥に御相談になつて、新羅を征伐されることになりました。

紀元八百六十年皇后はいよいよ御出発の用意をなされ、香椎の海岸へお出ましになつて、海水で髪をお洗ひになり、男のやうにみづらに髪をおゆひになつて、「われ今かりに男の姿になつて征伐に出かける。あまたの神々のおたすけと、其の方どもの骨折で、見事に新羅を平げよう。」とおほせられました。武内宿禰をはじめ一同のものは、「謹んで仰に従ひ奉ります。」とお答へ申し上げました。

皇后は船いくさを引きつれて、対馬にお渡りになり、それから新羅に向はれましたが、新羅王は我が軍勢の盛なのを見て少しも手向ひをしないで、恐れ入つて降参しました。さうして皇后の御前で、「たとひ太陽が西から出で、川の水がさかさまに流れる時はあつても、毎年貢物を納めることは決して怠りません。」と固くお約束申し上げまし

た。

(三韓の降参) 一番強い新羅がかういふ有様でしたから、百済・高句麗もひきつづいて降参しますし、熊襲も自然にしづまってしまいました。

(朝鮮との交通) これから朝鮮との交通がだんだん盛になって、皇后の御子第十五代応神天皇の御代には、王仁といふ学者が百済から来て学問を伝えました。又機織・鍛冶などの職人も、おひおひ渡って来まして、我が国は大へんに開けてまゐりました。これは全く神功皇后のおかげでございます。

(ルビ・地図省略)

3. 朝鮮と台湾の「国史」教科書の違い

挿し絵などを省いたので教科書としての雰囲気欠けるが、初等教育に歴史学習が導入された当初から、朝鮮と台湾では一見してかなりの違いがあったことが理解されるであろう。まず目につくのは用語の違いである。朝鮮の歴史教科書は堅苦しい文語体で書かれているのに、台湾のものは平易な敬体口語で書かれている。これは単に歴史教育の問題のみにとどまらず、両者における言語政策の違いにもかかわっていると考えられる。

内容的に見ると、この朝鮮の『普通学校国史』は国定第三期歴史教科書である『尋常小学国史』(1920年)に、若干の朝鮮史に関する項目(「朝

鮮事歴教材」)を補充したものである。⁽⁴⁾ この点について鄭在哲は、「皇国史観と植民史観に立脚して日本の歴史を称賛する一方、選別的に若干収録された韓国史(朝鮮史)は主体性と自主性が欠如した従属的な立場で歪曲・捏造してそれぞれ叙述されている」と批判している。⁽⁵⁾

この教材の思想的問題は後で触れることにして、まず形式的側面から見ていこう。上の「朝鮮事歴教材」が補充されているので、『普通学校国史』は頁数が国定教科書より多く、上巻171頁、下巻163頁になっている。それに対して台湾の『公学校用日本歴史』では当初「国史」の表題を採用せず、1935年から「公学校国史」になったことに示されるように、ナショナリズムの度合いもやや弱かったが、分量的にも逆に国定教科書よりずっと軽減されており、上巻113頁、下巻131頁である。これは課の構成にも当然影響しており、『普通学校国史』は上下巻で計52課、『公学校用日本歴史』は上下巻で計44課になっている。『公学校日本歴史』のほうで課の数が少ないだけではない。各課を分節単位で見ると、『普通学校国史』にはあっても『公学校用日本歴史』では省略されている事項や、掲載されていても各課の末尾に活字を一段落として注記的に扱われている事項がかなり多い。授業の中で適宜省略ないし生徒の自習にゆだねることができるような構成になっているのである。

したがって単に分量だけ見ても、国史に関し

(4)『普通学校国史教授参考書(朝鮮事歴教材)』(朝鮮総督府、1923年)の緒言によれば、国定の尋常小学国史の教材だけでは「朝鮮半島変遷の大要をしらしむるに稍不足なるを以て」加えられたもので、上巻では「朴赫居世王・新羅一統・王建・大党国師・朝鮮の太祖」の5課、下巻では「李退溪と李栗谷・英祖と正祖・朝鮮の国情」の3課である。ただしこれは朝鮮民族の自覚を促すために入れられたものではない。例えば

「朴赫居世王」は「第四 神功皇后」の直前に入れられているが、これは「神功皇后」の課で「三韓につきて学ぶ前、予め新羅・百済、高麗並に北部朝鮮の沿革につき教ふるものなれば、右課に聯絡せしむるに注意すべし」(同4頁)とされている。

(5)鄭在哲『日帝の對韓國植民地教育政策史』、一志社、1985年、365-366頁。

ては朝鮮人の子どもは日本人の子どもより朝鮮史の分だけ学習負担が大きく、逆に台湾人の子どもは日本人の子どもよりも大幅に軽減されていたと言える。これは歴史教科書の文体が文語体であったことや、国語（日本語）学習における時間数が台湾より少なかったことともあいまって、当時の朝鮮人の子どもは分量の点だけ見てもいっそう苛酷な学習を強いられたことになる。このことの意味は、就学率が台湾のほうが朝鮮よりも高かった（1936年で見ると、朝鮮：約25%、台湾：約44%）こととも関連させて、一層究明する必要があるだろう。

さらに歴史学習としてのもっと本質的な違いは、台湾の歴史教科書には朝鮮の場合とは逆に、台湾固有の歴史的記述がほとんどないことである。台湾が日本に侵略されて植民地となる過程を除けば、歴史の舞台にほとんど台湾が登場しないのである。これは1937年の改訂でもほとんど変わっていない。

朝鮮の場合と比べてもう一つの特徴は、台湾のほうが内容形式の両面において教科書の変化が少ないということである。「表2」でみるように朝鮮の歴史教科書は内地の国定教科書以上にしばしば改訂されており、1944年の最後の改訂に至るまで、朝鮮独自の歴史教科書を発行しているのに、台湾の歴史教科書は最初期に発行された『公学校用・日本歴史』（上下2巻、1922・1923年発行）が1937・1938年に一度それぞれ改訂されただけで、1944年度からは文部省の『初等科国史』を1年遅れで使用するようになっている。しかも『初等国史』の出現に見られるように、朝鮮では教科書の用語や名称を含めて内容的に大きな改訂がなされているのに対して、台湾では若干の手直しがされたという程度で、内容的に大きな変化があったわけではない。また台湾の国語教科書にはかなりの数の台湾関係

教材があったが、その大部分は地理的教材で、台湾固有の歴史にかかわるものはほとんどない。これに対して朝鮮の国語教科書にはかなりの歴史上の人物が含まれていた。これも朝鮮と台湾の歴史教育の基本的な違いの一つとなるであろう。

台湾の国史教科書に固有の台湾史が欠けていたのは、日本の植民地統治政策において、中国からの台湾の切離しが意図されていたためであろう。漢文や儒教教材のばあいも、利用可能と思われるものは残したが、少しでも中国固有のものを想起させるおそれがあると慎重に遠ざけられている。歴史の場合でも、多少なりとも固有の台湾史に触れるなら、必然的に大多数の台湾民衆が中国から渡来してきたことを想起させてしまう。朝鮮と違って比較的固有の民族意識の薄かった台湾では、民族史教育に対する要求が弱かったためもあるだろう。「内地」の国定国史教科書のねらいが、その時期の日本の対外政策と見事に連動していたことはよく知られているが、植民地においてはこのように、その時々教育目的（＝統治上の要求）に応じて、一層露骨な使い分けをして来たのである。

4. 「内鮮一体」と教科書の共用

これは歴史教育だけに限らないが、朝鮮と台湾のもう一つの大きな違いは、朝鮮では植民地教育の最後の段階で、日本人と朝鮮人の教科書の共通使用が目ざされていたということである。「内鮮一体」を教育において実現するためには、「差別」の撤廃——実質的な「共学」の実現を行う必要がある。しかし周知のようにこれはいっしょに行われなかった。制度的には1937年「普通学校」を「小学校」に改めて、形式的な資格は同等になっても、進学や就職上の差別も

表2 朝鮮と台湾での歴史教科書改訂状況の比較

(いずれも「上巻」または「第五学年用」の発行年を示す。文は文語体、常は常体口語、敬は敬体口語での表記であることを示す)

	内地	朝鮮	台湾
1920	a 『尋常小学国史』 文		
1921		「日本歴史補充教材」	
1922		『普通学校国史』 文	
1923			『公学校用日本歴史』 敬
1924			
1925			
1926			
1927			
1928			
1929			
1930			
1931			
1932		『初等国史』 敬	
1933			
1934	『尋常小学国史』 常		
1935			
1936			
1937		『初等国史』 常	c 『公学校国史』 敬
1938		b 『国史地理』 敬	
1939			
1940	『小学国史』 常	『初等国史』 敬	
1941			
1942			
1943	『初等科国史』 敬		
1944		『初等国史』 敬	d 『初等科国史』 敬
1945			

- a 国定歴史教科書としては第三期になる。第一期の国定歴史教科書『小学日本歴史』は1904年、第二期の『尋常小学日本歴史』は1910年（翌年日韓併合に伴う手直しあり）に刊行されている。
- b 4年制小学校用の国史・地理統合教科書（上下2巻）。
- c 正確な表題は『公学校国史・第一種』。
- d 内地の『初等科国史』と同一の教科書。

なくなっていない。そこで「内鮮一体」が一定の内容のあるものになるように行われたのが教科書の「内鮮共用」であった。当時朝鮮に居住していた内地人の子どもと朝鮮人の子どもの使用する教科書をできるだけ同一にしようというのである。これは同時期の台湾や「満洲・満洲国」ではなかったことである。教科書の内容の分析はもちろん重要だが、教科書の運用のされ方も重要である。

「共用」には（A）文部省編纂の国定教科書を使用する（内地と植民地で同じ教科書を使用する）場合と、（B）朝鮮総督府で編纂した教科書を朝鮮人の子どもと日本人の子どもとが共通に使用するという場合と両方ある。また全学年にわたって共用する場合と、一部の学年に限って共用する場合とある。例えば音楽は全学年で朝鮮総督府編の教科書を共用し、図画は全学年で文部省編の国定教科書を共用している。それに対して工作は低学年では文部省編の国定教科書、高学年では朝鮮総督府編の教科書を共用していた。修身や国語では、低学年は別の教科書を使い、高学年でどちらかの教科書を共用していた。

国史の教科書は1939年度から、朝鮮総督府編纂の『初等国史』巻二を第6学年で共用することになった。翌1940年新しく改訂された『初等国史・第五学年』（このときより学年毎の表題を付ける）が第5学年で共用されるようになり、翌1941年には改訂された『初等国史・第六学年』が刊行されて共通使用体制が完成した。この『初等国史』は昭和19（1944）年にさらに改訂されている。これに対して、台湾ではこのよう

に積極的な教科書共通使用の試みはなかった。

朝鮮総督府編の『初等国史』（1940、1941年）は、教育課程としては循環法をとり、5学年では「国体明徴」、6学年では「国運進展」を中心として、同じ歴史を二度くり返して教える態勢をとっている。目録を見ると、課名は従来採用されていた人名や事件名ではなく、「国がら」「ことむけ」「まつりごと」「神のまもり」等皇国史観の源泉をなすものから始まって、「世のすすみ」「改新のもとり」「都のさかえ」「国風のあらはれ」等、いわば超歴史的な用語を用いている。かつて例のないことであるが、この結果皇国史観に基づく点は同じでも、『初等国史』は個々の「史実」がいちじるしく簡略化されて、国定教科書の『初等科国史』（1943年）とは一見非常に違うものとなった。「史実よりは史観」を教える教科書となった。換言すればこれまで日本人なら常識であったような史実が日本人に教えられなくなるわけである。個々の「史実」を丸暗記することが歴史学習とする常識に大転換が生じたのである。朝鮮人を兵隊にとらねなければならなくなった段階で⁽⁶⁾、「天皇への忠誠」を吹き込むためになりふり構わず史実の教育を最低限に押さえて編纂されたのが、この内鮮共用の国史教科書だった。いわば「皇国臣民ノ誓」の国史版である。

5. 「皇国史観」の原点としての神功皇后神話教材——征服と交流のバランス

神功皇后神話は皇国史観の原点である。金光

(6)宮田節子によれば、「満洲国」成立後朝鮮軍は早晩朝鮮人を徴集して「兵員資源ノ不足」を補わざるをえず、天皇の軍隊にふさわしい資質をもった朝鮮人を望めば望むほど「現実とのギャップは大きく意識され、

そのギャップが大きければ大きいほど、危機感は増大し、総督府への発言力は強化され、狂信的な皇民化教育をもたらしたと論じている。(宮田節子「皇民化教育の構造」、『朝鮮史研究会論文集』、第29、1991年。

哲のいうように、「日本は神国」というときの「神国」の語は、神功皇后の「新羅征伐」と密接に結びついて想起される概念なのである。豊臣秀吉の朝鮮侵略は、「善隣友好」の中から生まれた「突然変異」ではなく、南北朝や室町期を通じて「新羅は日本の犬譚」などを内容とする新しい「神功皇后の朝鮮観」の浸透によって形成された歴史意識に立脚して起こったものである。⁽⁷⁾

朴鐘鳴は「朝鮮王朝は、伝統的に日本を《島夷》とみなし、恩恵的に外交関係を設定」してきたが、「一方日本は《武威》を基礎に自らを《小中華》的に位置づける観念の中で外交関係を設定してきた」。秀吉の朝鮮侵略終結後の国交回復は、それらの観念に関わりなく、国と国とが信義を通わすという意味合いをこめて「通信使」と呼ばれた。これは秀吉のような侵略に比すれば、国益の面で考えても「双方にとって格段に賢明な選択で」あった、と述べている。⁽⁸⁾

これは朝鮮との関係を基本的に善隣関係として考える江戸時代の儒学者の歴史観につながるものと言えよう。自ら施設接待に直接かかわった雨森芳州はじめ、林大学頭、頼山陽、貝原益軒など江戸時代の代表的な儒学者たちの多くは秀吉の朝鮮侵略には批判的であった。江戸時代の歴史観にはこれに対比されるもう一つの流れとして、秀吉の朝鮮侵略に従軍した人々による戦記ものの流れがあった。特に幕末になると、いわば思想界のアウトサイダーの側から征韓思想が現れてくる。吉田松陰などはその典型であるが、朝鮮との善隣を唱える正統派を批判する

ために、『日本書紀』を振りかざして、朝鮮を朝貢国とみなす歴史観が主流となった。⁽⁹⁾ これは寺子屋の教材にまで出現している。この歴史観は明治になってからもあまり変わらなかった。当時もっとも啓蒙的であった福沢諭吉でさえ、なぜそれが起きたのかその原因はわからないと言いながらも、神功皇后の朝鮮征伐は事実だと思っていたのである。

同時に神功皇后の新羅征伐神話は、日本の歴史教育の近代性（史実＝社会史・文化史的側面）と前近代性（神話＝皇国史観）とを対比的に描き出し、近世（寺子屋教材）にまで溯って後者の起源をとらえ、それによって前者が次第に駆逐されていく過程を明らかにするには最適の教材でもある。特に朝鮮総督府の国史教科書でそれが教科書の改訂ごとに変容していく点は、日本の植民地教育の本質を端的に表しているものと見てよい。⁽¹⁰⁾

「神功皇后」教材は、これだけを孤立させずに、「王仁・神功」教材としてとらえるのがより適切であろう。これは古代における二つの「日朝」関係を表していると考えられるからである。「王仁」は人々や文化の渡来のような客観的史実（交流）を、「神功」は「武威」に基づく神話的な自己優位観（侵略）を象徴していると見られるからである。そのどちらを強調しているか、そのバランスが教科書の性格を見る上で重要になる。もっとも、王仁は早くから神功皇后と結びつけられていた。新羅の国は神功皇后が「うちとらせ給たるくに」であり、かつ「日本ノ領ニシタガ」える国で、「朝貢国」であるという固定観念からすれば、王仁はその朝貢

(7) 金光哲『中近世における朝鮮観の創出』、校倉書房、1999年、25頁および194頁。

(8) 朴鐘鳴「巻頭言・国際化、そして日本」、『東アジア研究』第26号、1999年。

(9) 姜在彦・李進熙「対談・日本における朝鮮研究の系

譜」、『季刊・三千里』34号、1983年。

(10) 朝鮮の国史教科書の改訂ごとの「神功皇后」教材の取扱いの変化とその解説は、前掲拙著に資料として掲載されている（同書、241-252頁）。

の象徴であった。⁽¹¹⁾ いずれにしても侵略の枠組みから抜け出すことはないことになる。

それにしても日本の国定国史教科書を見ると、最初期の『小学日本歴史、高等小学校第一学年用』(1904年)では「王仁」と「神功」のバランスが比較的取れていた。それが朝鮮の普通学校に歴史科目の導入されるころになると、もっぱら神功の権威と功績が強調されるようになる。さらに国定教科書でもそうだが、朝鮮の国史教科書では一層激しい変化＝三韓征服神話の潤色・改作が行われている。一方、戦時期の朝鮮の『初等国史』では「循環カリキュラム」を採用して、「神代」から現代までを第5学年と第6学年で二度くり返して学ばせたので、神功皇后も二度登場する。ただし第6学年では、神功皇后は朝鮮を「おことむけ」になったと一言いうだけで「征服物語」はくり返していない。一方台湾では「神話性(皇国史観)」の象徴である神功皇后の挿し絵がなく、侵略性が若干緩和された教材になっている。また内地の国定歴史教科書でも同時期の高等小学校の教科書では、「神功」はそれほど強調されず、むしろ「王仁」に代表されている社会史・文化史の方面が強調されているのも興味深い事実である。

6. 国語(日本語)教育と国史(歴史)教育との相互関連

戦前の日本の教育においては、言語(国語)教育と歴史(国史)教育の相互関連性が非常に強かった。これは特に初等教育——小学校・普通学校・公学校——について言えることである。

国史の教科書は非常に物語性が強く、一方国語の教科書は国史教材を多く掲載していた。国史教育の本質をとらえるには国語と国史の相関に注意する必要がある。

周知のように戦時下の国民学校制度のもとでは、修身・国語・国史・地理が「国民科」として統合された。カリキュラムとして融合されたわけではないが、相互に深い関連をもつものとされた。修身・国史・地理(戦後の表現では内容教科)が統合されるのは、戦後の社会科をみても納得できるが、これに国語(言語＝用具教科)まで加えるのはお門違いだという反対論が国民学校制度の審議中に出されている。それにもかかわらず統合されたのは「国語」が「国史」と同様に強いイデオロギー性をもっていた、つまり単なる用具ではなく、それ自体が内容教科であった、というよりその役割を期待されていた、ということである。近代日本における「国語」は単なる言語ではなく、「国史」と並んで皇国主義イデオロギーを注入するメディアだった。⁽¹²⁾ それはある意味で現在も続いている。特に国史は戦後いったん解体されたが、国語はほとんど無傷だったと言えよう。

歴史には本来 Geschichte(できごと)と Histoire(できごとの説明)の両面がある。これと正確に一致するとは言えないが、近代日本においては科学(史実)としての歴史と文学(語り)としての歴史の相克がある。国語とかかわるのは後者(語り)のほうであり、これには神話なども含まれてくる。近代日本の歴史教育は、殊に初等教育のそれは圧倒的に後者であった。それが「語り＝騙り」としての歴史教育史

(11)金光哲、前掲書、116-117頁。

(12)上田万年が「日本語は日本人の精神的血液なりといひつべし。日本の国体は、この精神的血液にて主として維持せられ、日本人種はこの最もつよき最も永く

保存せられるべき鎖の為に散乱せざるなり」と言っているのはその典型であろう(イ・ヨンスク『「国語」という思想—近代日本の言語認識』、岩波書店、1996年、122-123頁より再引用)。

になるのである。もっとも近代日本の歴史学や歴史教育の成立過程において、両者のせめぎあいのような面もみられる（久米邦武事件など）。神功皇后教材は、この国史と国語との関係をもよく示している。日本内地では神功物語は寺子屋の教材にもあり、日常生活においても、神功皇后やその子である應神天皇をデザインした団扇や花瓶や彫刻などに好んで用いられていたことを米人グリフィスは観察している。⁽¹³⁾ 歴史教科書のほか、国語読本にも神功皇后の神話は頻繁に登場していた。例えば『帝国読本』巻之八の「第十六課 神功皇后の三韓征伐」（1882年）、文部省『尋常小学読本』巻四、「ダイ十八 神功皇后」（1904年）などである。いっぽう始めのころの朝鮮総督府の国語教科書には、「日本武尊」や「應神天皇」は出てくるが、「神功皇后」や「三韓征伐」は登場しない（朝鮮総督府『訂正再版・普通学校国語読本』巻五、1918年）。「應神天皇」では人々や王仁による漢字（論語や千字文）の渡来を中心に叙述している。その後導入された普通学校の国史教科書に、「神功皇后の三韓征伐」が堂々と出てくるようになるのとは対照的である。

日本の尋常小学校国史教科書は物語性が強いが、これは軍記ものを愛好した日本人の歴史観に合致していたと見られる。江戸時代の「四十七義士」事件はその典型であり、これは国語の教材にもなっている。しかし同時代の高等小学校の国史教科書ではこれを全く扱わず、代わりに元禄時代の社会や文化を詳しく扱っているのである。国語と国史の密接な関係は尋常小学校の特徴であり、1940年の第五期国定歴史教科書『小学国史』からは、国語の教科書の監修者である井上超が教科書の文体に関与するようにな

り、とりわけ戦時下の国民学校初等科の『初等科国史』（第六期国定歴史教科書）はきわめて読み物的であり、もっとも国語読本に接近した国史教科書になったのである。

7. 結び——「民族意識抹殺」の諸相の究明を

いうまでもなく韓国をはじめかつて日本が植民地化した東アジア諸国と、現在の日本との「歴史認識」のギャップ、とりわけ歴史教科書の記述の対立を克服するには、現在のみならず、過去にさかのぼって解明してその原因をより歴史的・内面的に明らかにすることが不可欠である。そのためにはとりわけ皇国史観がいかに植民地化された朝鮮や台湾などにもちこまれたかを明らかにすることが必要である。そのことから、現在のはたしてそのような史観が「克服」されたかどうかも見えてくるであろう。

そのためには実際に使われた教科書のレベルにまで降りて、教材の持つ具体的な思想を検討する必要がある。法令レベルだけで見ると、どの時期においても、「朝鮮史と朝鮮地理」という教科をこれまでのように各級学校で完全に排除して、韓国国民の歴史意識と民族意識の成長を抹殺し、小学校の高学年では「国史」科と「地理」科を……設置して、日本の歴史と地理を教授することによって韓国国民に日本人意識を注入させようとした」、ということの繰り返しになる。⁽¹⁴⁾ その事実間違いはないが、時期的・地域的な状況の違いや発展段階をもう少し具体的・構造的にとらえる必要があるように思われる。

神功皇后神話に端的に見られるように、教科

(13) William Eliot Griffis, "JAPAN: in history, folklore and art", The Riverside Press, Cambridge,

Mass., 1892, p.54.

(14) 鄭在哲前掲書、432頁ほか。

書を含む植民地文化は、もともとは日本内地からの「輸出」であるが、それと同時に植民地における特殊事情にあわせて内容が改変され、あるいは内地ではできない実験が行われて、それがその植民地在住の日本人の教育に影響し、ひいてはその結果の一部が日本内地に逆輸入されることもあった。またその改変自体が植民地の「同化」のためであるというよりも、内地「防衛」のためと考えられる点もある。植民地を皇民化の点で手心を加えてしまうと、肝心の「内地」がもたなくなると心配されたからである。⁽¹⁵⁾

それと同時に日本人の立場から見れば、植民地を含む「大日本帝国」の国史教育における

「表街道」と「裏街道」を統一的にとらえることによって、はじめて近代日本における総体としての歴史教育の内実を明らかにすることができると言える。植民地での「国史」教育をとらえて、はじめて「日本内地」での国史教育の意味もより明かとなるのである。これを単なる過去の否定的な側面としてのみとらえるのではなく、さらに一般化してとらえうるならば、孤立した単一の「日本史」はありえず、「東アジア史」として「日本史」をとらえるべきだという傾向が一般的になりつつある今日の歴史研究の状況に対応した、歴史教育のあるべき姿に対しても一定の示唆を与えるものにもなりうるであろう。

(15) 駒込武は日本の支配層の間に、植民地支配によって日本人としての同一性が脅かされることへの危機意識があったといい、「天皇制の教説により情緒的な一体

感を醸成することで……帝国統合の危機を乗り切ろうとしたという事情」を見出している（駒込武『植民地帝国日本の文化統合』、岩波書店、1996年、233-234頁）。